

水稻種子の取り扱いは丁寧に

松本農業農村支援センター

浸種作業は育苗の重要なポイントです。基本事項を守り、育苗に向けた種子の準備は丁寧に行いましょう。

1. 浸種温度は10～13℃、積算温度は100℃（13℃で8日間、10℃で10日間）を目安に十分な浸種を行ってください。

浸種温度を高温にして浸種時間の短縮をねらったり、適水温でも浸種時間が不足すると、吸水不足による発芽遅れや、催芽ムラの原因になるので、丁寧な管理を行いましょう。

2. 浸種初期（浸種初日）を低水温（3～5℃^{（注1）}）にした場合、発芽勢^{（注2）}が著しく低下する事があります。

発芽勢の低下は、発芽遅れや催芽ムラの発生、苗の生育不揃いの原因になるので、浸種初期の温度が5℃以下にならないように注意してください（必ず水温をはかってから、浸種を始めるように心がけましょう）。

3. 浸種の水量は容量比で種子の2倍以上（種子1kgに水4ℓ）のたっぷりの水で浸種し、浸種期間中は1～2日毎に新しい水に換えてください。

ただし、薬剤による種子消毒後の浸種では、最初の2～3日間は停滞水で換水はしません。この場合は4日目から換水するか、水を循環して酸素を供給してください。

4. 浸種中は、種子の上下の入れ替えを行い、温度ムラにならないように注意してください。

5. 平成22年や令和5年のような高温登熟条件下で生産された種子は休眠が深く、平年より発芽勢^{（注2）}が劣ることがあります。

松本農業農村支援センターの発芽調査の結果では、松本管内の採種圃場で生産された「令和5年産種子」で、発芽勢が劣る事例はありませんでしたが、上記の通り基本事項を守り丁寧な管理をお願いします。

注1： 3～5℃は手をつけていられない水温です。

水道水の水温は7～8℃位（支援センター2月末調べ）ですが、流し始めの最初の水は2～3℃の冷水になっている場合があります。水道水を使う場合は2～3分流しっぱなしにして、水温をはかってから使用しましょう。

また、あまり寒い場所に浸種桶を設置することは避けましょう。

注2： 発芽勢とは、発芽率測定方法による、5日目の発芽率をいいます。